

緑のエッセー

私は林業に従事する前、大阪でサラリーマンとして働いていました。印刷の営業や介護などの仕事を経験しましたが、慌ただしい都会での生活は自分には向いていないと感じ始め、「田舎暮らしがしたい」という思いが日ごとに強くなっていました。

しかし、いくら田舎に憧れても、仕事が必要れば生活は成り立ちません。かといって、都会と同じような仕事はしたくありませんでした。第一次産業、中でも

む中、都会から若者を受け入れて後継者を育て、林業を守っていこうという考えがありました。しかし、いくらやる気があっても、都会からやって来て木に触ったこともないような人間が、いきなり森の作業をこなせるわけありません。教える側としても、仕事をしながらでは余裕がなく、なかなか人が育てられないという悩みを抱えていたそうです。

そんな現場の状況に答えるため、平成14年度から林野庁の「緑の雇用」事業が始



平成18年、信州上小森林組合採用後、「緑の雇用」担い手対策事業にて林業の基本的な知識・技能を学び、現在は、通年雇用で造林保育事業から林産事業（素材生産）まで幅広く従事。39歳。

びます。私は、さらに両方の修了者を対象とした森林施業効率化研修を受けました。これは伐採した材を運び出すための道づくりに関する知識と技能などを学ぶものです。これを習得しなければ、いつまでも先輩に頼らないと作業の流れ自体が作れません。ですから、この研修は「いよいよ自分も一人前に近づいてきた」というような自信と自覚を強めてくれました。

森の仕事に就いて4年目ですが、いま

「眠れる資源」と言われる森林を整備・利用する林業に将来性を感じ、ぜひ取り組んでみたいと思ったのです。

そこで、長野県や富山県などあちこちの県庁所在地へ出かけ、林業の求人を探し回りました。そんな時、長野県林業労働財団が主催する林業の求人と、求職をマッチングする「就業相談会」が開催されました。そこで出会ったのが、現在勤務している信州上小森林組合でした。組合では、地元の若者の林業離れが進

まり、働きながら林業の研修が受けられるようになりました。私が就職した平成18年度からは事業内容も拡充し、充実した研修が受けられ本場に役立っています。というより、この事業がなかったら、田舎に定住し林業に従事し続けるのは難しかったかもしれません。

1年目（基本研修）は植付け、下刈り、間伐など林業の基本的な技術を学び、2年目（技術高度化研修）は最も災害の危険が高い風倒木やかかり木の処理方法を学

だに毎日飽きることがありません。ストレスがないせいか、大阪では治らなかつたアトピーもすっかり治ってしまっただけです。まだまだ自分の技術も向上させたいし、手入れを待っている山はいくらでもあります。都会暮らしでの自分は何万人かの一人でしたが、ここでは何百人かの一人であり、自分の仕事も生活も、まわりの人や自然と相互に関わり合っていることが実感でき、すべてにおいてやりがいがあります。